

## 日本のアイデンティティと外交政策

ロナルド A. モース (Ronald A. Morse)  
カリフォルニア大学 寺崎記念日米研究教授

平成14年3月12日

RIPESS 経済社会総合研究センター  
麗澤大学  
〒277-8686 千葉県柏市光ヶ丘2-1-1  
Tel:04-7173-3761 / Fax:04-7173-3767

# 日本のアイデンティティと外交政策

カリフォルニア大学 寺崎記念日米研究教授 ロナルド A. モース

## 目次

はじめに .....	1
アイデアリズムとアイデンティティ .....	2
日本の文化と文明 .....	3
アイデンティティと伝統 .....	6
現在の日本外交 .....	7
戦後の制度 .....	7
日本はリーダーとなりえるのか .....	9
理想主義的平和主義外交 .....	10
新しい外交に向けて .....	11
日本の外交選択 .....	12

## はじめに

35年前、初めて日本に来た時から、私は常に日本とアイデンティティーの問題について考えつづけてきた。この問題については、さまざまな観点から取り沙汰されて来たが、私はここで、一つの考え方を提案したいと思う。

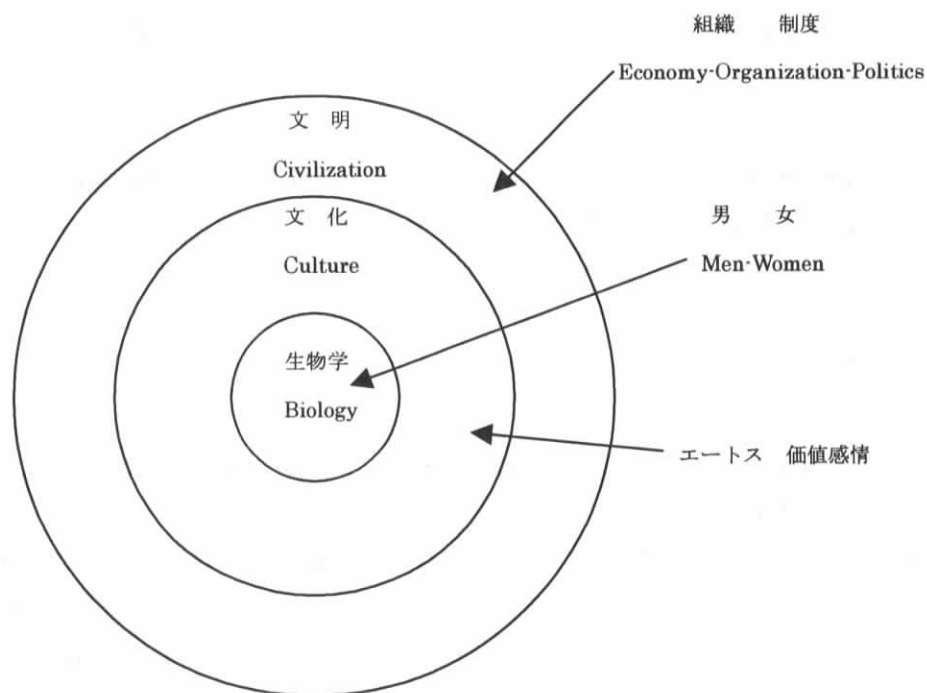
最初に、この論文とかかわりの深い一つのエピソードについて触れたい。

25年前、私は柳田国男と日本民族学という博士論文を書いた。その当時、日本の民俗学や文化研究の中で、柳田国男に対する評価は非常に高かったが、私は、柳田国男の創作とされていた日本民族学の方法論は、ほとんどがイギリスをまねて書かれたものである、ということ論文にした。彼がフレイザー—Sir James Frazer (1853—1916) やゴム George Gomme (*Folklore as an Historical Science*, 1908) の民俗学や言語学の方法論を読み、注をつけたものが日本民族学になった、ということを実証的に示したのだが、民俗学者の間ではあまり歓迎されなかった。日本人が書いたものではあっても、その方法論、way of thinking が外国のものである、という論点は、この論文の趣旨と深いかかわりがある。

つまり、今現在日本人が日本の文化であるとか日本の伝統であるとか、日本のアイデンティティーであるとか捉えているものの多くは、実は、日本の過去の歴史から出て来たものではないということである。むしろ、現在の日本のアイデンティティーや外交政策は、1945年、日本人が占領軍によって強制的に押し付けられた日本憲法と関係が深いといえる。もしそれが本当なら、柳田国男の例と同じように、日本的と捉えられていたものが、実は日本の伝統とはかけ離れたものであるということがわかってくる。

まず、この論説の中心となるいくつかの概念と考え方について説明しよう。

図に示した生物学、文化、文明の概念は、日本のアイデンティティーと外交政策の関係を理解するために非常に重要なものである。



次に、それぞれの概念について、もう少し説明しよう。

#### 生物学

生物学的にいつて、人間は攻撃的に作られている。それと同時に、生き残るために重要なコミュニケーション能力や、言語能力をもつ点でも、特別な存在である。人間の心というのは、完全には理解できないように、あらかじめ遺伝子情報が組み込まれているのかもしれない。ある専門家が指摘したように、うそを言い、同族を殺し、より複雑な武器を開発して使いこなす技術と能力を持っているのは人間だけである。

#### 文化

文化は人間によって作られた。人間は文化を学び、他者に伝え、分かちあってきた。ソフトウェアであり、ナビゲーションの技術であり、問題を解決するための知識や人間の行動範囲をプログラムするためのエネルギーを作る領域でもある。文化はまた包括的なもので、いろいろな部分が織り込まれて出来上がった一つの繊維のようなものである。また、意識と無意識を混ぜ合わせた第六感のようなものでもある。文化には地理的要素や気候も大きな役割を果たしている。

#### 文明

ラテン語の *Civis* は市民を意味し、*civitas* はまちの状態を示す。文明にはその時代の文化が反映されることもあるが、必ずしもそうとは限らない。または、文明は文化に特定されないものである。文明は公の機構や組織であり、科学技術や法律、憲法でもある。時に排他的であり、時に包括的である。文化より、もっと広い範囲を網羅し、より広がりやすい性格を持っている。

### アイデアリズムとアイデンティティー

前述の内容を心にとめてもらった上で、私が言いたいことの基本的な要点をまとめてみようと思う。

#### 1. Japan's historical success has come from its ability to change with the times.

日本が、過去 200 年間の歴史を通じて発展を遂げることができたのは、時代に応じて変化できる才能をもっていたからである。日本は常に変化している。現在の日本の「アイデンティティー」が、どこまで日本的なものであるか、またはどこまでグローバリゼーションの影響を受けているか、それをどのように捉えるかということが、一つのテーマだと思う。

#### 2. The Japanese relatively "idealistic" view of the world today (its foreign policy) is very un-Japanese.

私は、現在の外交政策にみられるような理想主義的世界観は、本来の日本人的な発想とはかけ離れていると思う。つまり、日本文化、伝統とあまりが関係ないと思っている。

#### 3. This Japanese idealism (identity) is a rich combination of Japanese and foreign elements.

この日本の理想主義（アイデンティティー固有性、独自性）は、日本と外国という二つの要素を贅沢にあわせもったものをさしている。

4. Japanese “identity” today has very little to do with so-called traditional Japanese cultural values.

前にも述べたように、しかし、今の日本のアイデンティティーといわゆる伝統的文化観とは異質なものである。

5. Japan’s success in the future will require an even greater abandonment of “traditional” Japanese culture.

日本が将来も発展を続けていこうとすれば、今以上に、伝統的文化観を切り捨てていくことになる。そしてそれは、よいとか悪いとかに関係なく、必然として起こる事実である。

6. Identity in French means “same”. So identity as used here is the distinguishing character of a person or nation sharing a set of common experiences or problem.

フランス語の identity は「同じ」ということを意味している。ここで使われている identity も、同じ経験や問題を共有している個人や国家のもつ、ある際立った性格のことをさしている。

産業革命、近代化、グローバリゼーションという流れの中で、日本はいつも変化してた。幸いにも、変化を遂げてきている。その中で、伝統的なもの（文化）と、日本のアイデンティティーと外交（文明）がどのような関係にあるかについて、次に説明しよう。

## 日本の文化と文明

日本では文化やその分析、解説も一つの産業である。本屋には日本人の書いた日本文化論が山のように積まれている。翻訳されたものもある。けれど、どれを見ても、何が文化なのかは明確でない。一つの主義といってもよい。最近発行された、五木寛之さんの「日本の心」にも、“私たちは本当の日本を知らない”という副題がつけられていた。どの本を見ても、日本人の心、日本人の魂という言葉が使われている。しかし、その定義についてはどこにも書かれていない。非常に感情的で、一つの産業だということをいつも感じさせられる。

以前、麗澤大学教授の伊東俊太郎氏と一緒に「文明の衝突」を書いたサミュエル・ハンチントンと食事した時に、ハンチントン氏が使っている文明という言葉について、伊東氏は日本語では文化と使うと説明されていた。別の著名な学者は、日本文化を言葉とか精神構造とか、宗教という風に定義していた。学者によって定義が違っている。

### 文化

文化とは何かということは、実際わかりにくいと思う。日本の“アイデンティティー”という言葉も同様である。なぜ日本人はわざわざ外来語であるアイデンティティーという言葉を使っているのだろう。その理由は、この言葉が曖昧に表現できる言葉だからだと私は思っている。はっきり定義できないように、外来語をもっとわかりにくくということなのかもしれない。麗澤大学の松本健一氏は、日本の帝国主義時代は、地理学的には日本が帝国主義で拡大し、戦後になって、豊かな経済大国になって、90年代はアイデンティティーの時代であると述べているが、そのアイデンティティーの時代ということも含め、日本人とは何なのか、日本文化とは何なのか、実際は誰もわからなくなっている。それが、いいか悪いかは別として、それが現実であるということだ。

文化とは何かということには、いくつもの考え方がある。たとえば、玉ネギ **onion** がそのひとつである。玉ネギを一つずつ外からはずしていくという考え方は、柳田国男の考え方と同じである。柳田国男は、つららにたとえているが、一層ずつはがして真中、真中へと入っていく。時代をはずして本質的なものにたどり着くということのたとえである。この他、文化の捉え方には以下のようなものがある。

- ・生きもの **organism**。血が流れて、脳があつて、生命があるといった捉え方。
- ・工場 **factory**。原材料とパワーソースがあつて、指導者や **workers** がどのように動いているかという捉え方。
- ・建物 **building**。 **foundation** があつて、窓があつてという捉え方。
- ・環境 **ecology**。 **food chain** とか **climate** とか環境とか、いくつかの要素が挙げられる。
- ・言語学的な分析からの捉え方。文法とか **dialects** があるという捉え方。
- ・暗号。言霊とか言葉を暗号としてどういう風に日本の文化を理解できるかという考え方。
- ・体。性格があつて、セックスがあつて、 **upbringing** があつてという捉え方。
- ・システム。 **inputs** とか **outputs** という要素が挙げられる。
- ・構造と。縦社会、ニーズとか目標という要素を持つ。
- ・ゲーム。 **plays** があつて **rules** があつてということ。
- ・芝居方。 **script** があつて **audience** があつてという見方。
- ・道で。 **streets** とか下水とか、近所とかということ。
- ・テキスト。 **author** とか **genre** とか **readers** などがある。
- ・ **ideology** としては分析。
- ・ **regime**。一つの国家体制ということ。お金があり、指導者がいて **rebels** もいる。

それぞれ役に立つ部分があるが、私が言いたいことは、前の図に示された生物的なもの、文化的、または文明的なものは、いつでも一緒に動いているということだ。文化を切り離して考えるということは無理がある。今の若い世代の人たちの文化と、80歳の人たちの文化はずいぶん違うし村に住んでいる人たちと町に住んでいる人たちとの文化は違う。また、教育レベルの高い人たちと教育のない人たちの文化も違う。つまり、誰の文化というより、日本であろうと外国であろうと多重構造の文化があるということだ。

もちろん、日本は単一民族なので、一つの文化圏と言えるかもしれない。たしかに地理的に、また国家として、文化として一つの地域になっていることは珍しいことである。中国とか西洋文化圏だったらいくつもの民族もあるし、言語学的にも複雑な問題がある。アメリカは多民族国家なので、黒人の文化、アメリカ人の文化、日系アメリカ人の文化、ヒスパニックの文化、ユダヤ人の文化といろいろあつて、誰の文化であるかということはいわからないし、一つの文化が支配しているということはない。そういう意味では、日本は特別であるといえるかもしれない。

しかし、サミュエル・ハンチントンの立場から見ると、日本が世界中で一番さびしい国 **lonely country** ということになる。日本は地理的にはアジアだが、中国やアジアの人々とそれほど親しくないし、西洋のものを真似して西洋の文化と近いようだが、実際は西洋人じゃない。そういう孤独な文明圏、 **lonely civilization** であるといえる。そういう意味で非常

に特殊だが、簡単に国内では一つの文化である、と言えないかもしれない。

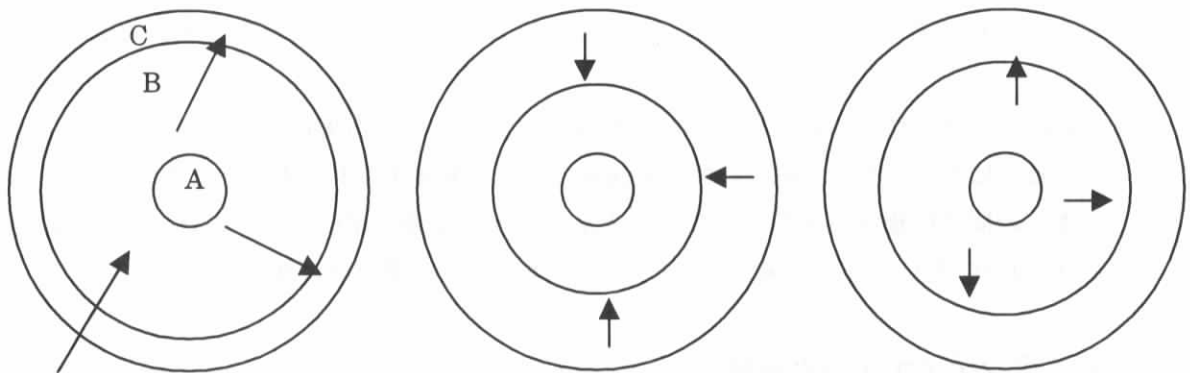
### 文明

たとえば産業構造についてみると、近代化も産業革命もすべてがヨーロッパから出たものである。産業革命の最初の波はアメリカに行き、そこからアジアへ移り、または日本へという経路で伝わってきた。つまり、本来の日本の歴史とは関係のないものだった。

この日本の構造の中で一番重要なものは憲法だが、第2次世界大戦後に制定された Constitution は、日本人が書いたものではない。現在の日本憲法の中で、日本の文化から出た考え方は一つもない。どちらとかいうと、日本文化と正反対の要素に基づいている。その憲法が、今、日本の政治組織、政治経済学となっている。日本人がその枠の中に住んでいるからといって、それが日本文化と関係があるかということは、非常に複雑な問題である。資本主義そのものもそうだが、日本のいろいろな組織を見ても、どれも日本文化とはあんまり関係がない。経済体制とか産業構造とか、現在の政治組織や制度を文明と捉えているが、実は外来文明なのではないだろうか。

ここで、最初に示した生物学、文化、文明の力関係が、時代によってどのように変化してきたのかについて見てよう。

- A 生物学 Biology : 民族は違っても生物学的には違いのない人間の本能的な次元
- B 文化 Culture : 芸術、倫理、道徳、家族などの概念を含む次元
- C 文明 Civilization : 政治、経済、組織、制度を含む次元



1945 年以前  
日本文化 B が  
大きな部分を占める

1945 年以降  
外来の組織、構造（憲法）が  
拡大し、日本文化の領域が狭くなる

現在の形  
日本人が日本文化の  
領域を広げようとする

図に示された3つのサークルのうち、最初のもは第2次世界大戦までの状況をあらわしている。この図を見ると、日本の文明と文化がかなり一致していたことがわかる。日本文化のところが比較的大きく、それは、天皇制のような江戸時代から明治・大正時代の日本の伝統的な文化と、教育勅語などの明治時代の文明（組織）とがかなり一致しているということである。勿論ドイツの憲法をはじめ、外国のものを借りてきてはいるが、基本的には日本的な伝統的文化がかなり大きい役割を果たしている。日本外交政策も日本人の文化的直感に基づいていた。



マックス・ウェーバーの分析によると、ドイツと日本を比較した場合、一つはクリスチャンの国で大陸の内部に位置し、日本は島国であってキリスト教ではないが、二つの国は非常によく似ている。発展の形も似ており、戦争も first war、second war と経験し、帝国主義も同じ、戦後、平和的になってからの外交政策もよく似ている。ドイツと日本は、封建時代とか封建制度といった伝統的な流れが一番動いている国だといえる。

現在の官僚体制には、士農工商という従属的な江戸時代の階級スタイルがまだ続いているといってもよい。無駄に使っている予算のうち一番多いのは、農家の米生産に関するものである。工業は製造業の段階で、日本人は非常によくやっているし、経済的には一番メインになっているのが商売だ。明治時代を和魂洋才とすると、現在は洋魂洋才という段階に近くなっている。日本的な要素がだんだんなくなっている。

明治時代の大日本帝国憲法は、ある意味で、日本の伝統的文化、江戸時代やそれ以前の文化とかなり一致している。天皇が京都から東京にきて、神社の合併政策があつて、もう一度天皇が日本の代表者になったということが、それを象徴的に示している。教育勅語も伝統的なものを再表現したものだ。王政復古も同様である。

明治時代には、日本の伝統的な考え方と文化と組織が、かなり一致していた。そうした状況の中で、最初に日本がやったのは戦争だった。日露戦争、日清戦争、第二次世界大戦と、武士の代わりに軍人がいる軍農工商にかわった。

中央のサークルに見えるように、戦争に負けて 1945 年以降の日本の文明（組織、構造）になると、民主主義、新しい憲法、男女平等など、日本の「伝統」とほとんど関係のないものが出てくる。つまり、文化の役割が非常に小さくなって、文明、または新しい組織が大きな役割を果たすようになった。この変化は日本の外交政策に非常に大きな影響を及ぼした。

右のサークルに示された現在の日本を見ると、文化の面が再び拡大している。日本が豊かな社会になったのは、戦後の民主主義制度が経済発展と平和をもたらしたからであるが、日本人の間では憲法（文明）の改正や天皇をもっと主要な地位に戻すことについて論議がされており、もしそれが実現するとしたら、日本の外交政策は再び変わるだろう。

## アイデンティティーと伝統

現在の日本外交政策は、このような複雑な文明の要素と文化の要素との調和から出てきている。それが日本の伝統とどこまで関係があるかということだが、たとえば、女性外務大臣が、今外務省の官僚組織を批判して戦っているということは、彼女は、日本の伝統的な官僚的な文化を批判している、と私は解釈する。または、小泉総理大臣が、族議員のこととか伝統的な自由民主党の政治を批判しているということは、民主主義という日本の歴史とは直接関係のない枠の中で直接国民と関係を作って、伝統的な日本的な官僚組織を批判しているということである。それは、間接的に伝統的日本文化を批判しているということになる。

そうすると、今現在、日本はある面で伝統的な考え方をかなり厳しく批判しているということになる。このような枠組みの中で、日本の伝統とか日本のアイデンティティーをどういう風に解釈しているかというのは難しいが、たとえば憲法第 9 条を変えて、日本人が



核兵器を作ることができるとしたら、日本が帝国主義の路線に戻る可能性は非常に高いのではないだろうか。だとしたら、戦後、豊かになった社会を守るためには憲法を修正しないほうがいいかもしれない。これが、現在の日本のアイデンティティーに関する議論である。

けれども、何を変えたらいいか、何を変えなくてはいけないか、その伝統はどこにあるのか、新しい次元はどこにあるのかということについて、日本の中で再び文化と文明が衝突している。日本の中で、組織と文化が衝突している。どちらが勝つかということが、今の議論だと思う。右翼と左翼、または、伝統主義的な人たちと理想主義的な人たちが戦っていて、それが今の日本のアイデンティティーの危機である。

しかし、一つ大切なことは、前述の3つの次元、つまり生物的には人間であるということと、組織（文明）、そして伝統的な文化、この3つがどのように動いているかを理解しない限り、アイデンティティーの全体像をつかむことは非常に難しいということである。

## 現在の日本外交

それでは、今の日本がとっている具体的な外交政策にはどんなものがあるのだろうか。

外交政策には3つの要素があるという見方がある。一つは **national survival**、国家の生き残り。もう一つは **security**、国家にとっての安全、防衛ということ。そして最後が **satisfaction**、満足、充足という3つの“S”があげられる。

**survival** とは、自国を他からの攻撃から守ることを示し、**security** とは、あらゆる地方や地域の紛争がより大きな戦争に拡大しないように防ぐことを意味している。

**survival** としての外交とは軍事力による抑止をさし、日本の場合は憲法による制限されているため、外交手段としては行使できない。また、**security** としての外交、つまり第二次世界大戦後に樹立された相互防衛関係に基づく集団安全保障についても憲法により制限されており、日本は実質的には行使できないことになっている。

日本の外交手段として有効なのは、**satisfaction** としての外交だけである。

第二次世界大戦を教訓に、1940年代に作られた国際平和維持組織である国連に参加し、第二次世界大戦後の経済荒廃に対処するために作られた、世界経済銀行(再建と発展のための国際銀行)と国際通貨基金(IMF)の設立に関与し、第三世界への経済支援を行うのが日本の外交である。

## 戦後の制度

70年代、東京大学教授の中根千枝氏は、「タテ社会の人間関係」の本の中で、現在の官僚制度のルーツが封建時代にあることにふれた。また、土居健郎氏は「甘えの構造」で、親と子供の関係にはじまり、学校が親の代わりになり、社会に出れば会社が家族になって、年功序列システムの中で一生まもってくれる、という日本の組織構造の特殊性を指摘した。

これらからわかることは、日本には集団認識がまだ働いているということである。個人主義が未熟であるということは、日本型官僚主義が続いているということでもある。戦後になっても、昔のような封建制度の様相が続いているのが日本の文化だと思う。

文化と文明との関係は戦後になって非常に複雑になった。制度が文化より重要な役割を

果たすことになったのである。この制度とは日本の制度ではなく、占領軍が作った制度である。その中で、今現在の日本外交を理解するために一番重要な要素は、憲法第9条の戦争放棄ということである。また、憲法第73条には、外交政策が内閣の責任であるということが書かれている。

## 日本国憲法 第2章 戦争の放棄

第9条【戦争の放棄、戦力および交戦権の否認】①日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

②前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

第73条【内閣の職務】内閣は、ほかの一般行政事務の外、左の事務を行ふ。

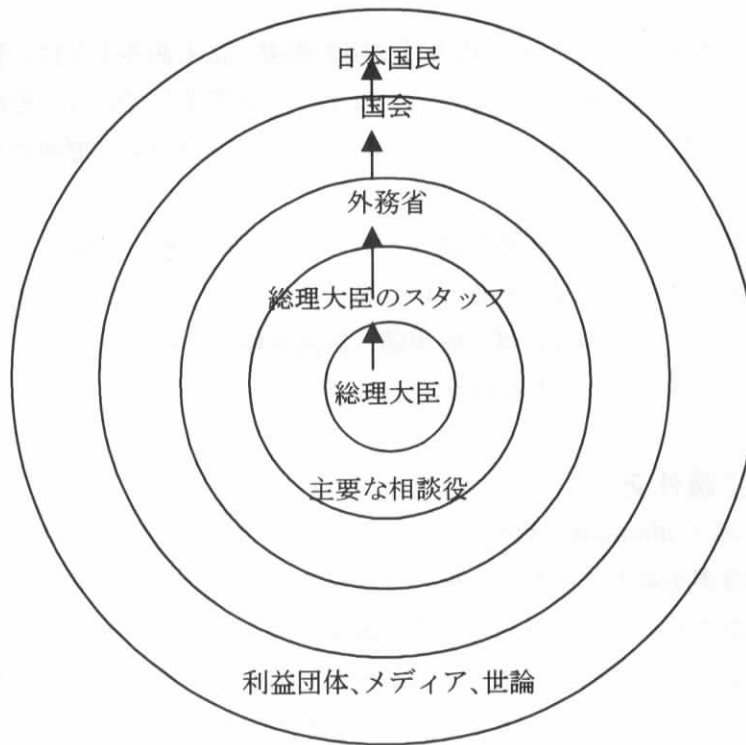
- 一 法律を誠実に執行し、国務を総理すること。
- 二 外交関係を処理すること。
- 三 条約を締結すること。但し、事前に、時宜によっては事後に、国会の承認を経ることを必要とする。
- 四 法律の定める基準に従ひ、管理に関する事務を掌理すること。
- 五 予算を作成して国会に提出すること。
- 六 この憲法および法律の規定を実施するために、政令を制定すること。但し、政令には、特にその法律の委任がある場合を除いては、罰則を設けることができない。
- 七 大赦、特赦、減刑、刑の執行の免除および復権を決定すること。

最近の新聞記事に、自由民主党の政策決定システムを批判的に取り扱ったものがあつた。族議員の根回しや、官僚と企業が料亭で情報交換や政策決定を行うやり方が、不透明で国民を無視していると指摘されていたが、これはむしろ日本では伝統的・封建的なやり方といえる。官僚と自由民主党、族議員と圧力団体が手を組んで国を支配している。農協が農業関係の族議員と手を組み予算を搾取している。建設業界や、また厚生省も同じである。

この一種の人脈と金脈に支配された社会主義的な国家体制を作っているという点では、日本的な文化はまだ続いているともいえるが、小泉内閣のやり方、たとえば、総理大臣が国家の政策を作り、経済関係者や自由民主党に説明をして、官僚をかなり無視して政治的に進めようとするのは、こうした伝統的な日本の政治構造と戦うことでもある。

外務省の機密予算や、官僚の天下りとその組織で保証される金額の法外さ、建設業界の財政赤字拡大など、十年間、国の経済が停滞しているのは、封建時代からずっと続いている日本の伝統的、文化的な要素のためである。

## 日本の新しい外交政策の決定プロセス



日本人が外国人とどのように違うのかについても多くの説がある。

精神構造が違う、頭脳が違う、道徳観が違うという説もある。倫理観に関しては、ひとつ面白い例がある。日本は民主主義体制に入って50年になるが、昨年まで情報開放法 (freedom of information) がなかった。その理由は、日本人が情報交換を好まないからだと思う。情報は私有物であり大事にしまって他人に見せない、というのが日本の伝統的な文化である。けれど、これは民主主義に反するやり方である。

戦前は天皇制があった。つまり、戦前は日本文化があつてが、戦後になって日本の集大成とは何かということはわからなくなった。天皇はもはや日本を代表する存在ではない。現在はシンボルにすぎない。世論調査を見ても、大部分の日本人は Emperor 天皇が日本を代表するとは考えていない。旗も、national song も日本を代表するものではない。それでは、戦後の日本を代表するのは何であるか。集大成が何であるかということが明確じゃないから、アイデンティティーという言葉を使っている。日本の文化の中心とは何なのか、本当はわからないのではないだろうか。

### 日本はリーダーとなりえるのか

現在、日本の中で起こっている文明と文化の関係の変化は、すべて日本にとって良いものかといえるのだろうか？そう考える人たちもいる。

東京財団会長の日下公人氏は、これからは、日本が世界をリードする超先端国である。21世紀に世界は日本化すると語っているが、なぜ日本が global leader になるのか、例として、脱軍備、脱武器輸出、脱宗教、脱イデオロギーを挙げている。これらはみな日本の

伝統や文化とは違うものである。日本にある一部の宗教も西洋宗教とはまったく違うし、イデオロギーに至っては存在しない。宗教がないということはアイデンティティーとは何かということでもある。

たとえば、サミュエル・ハンチントン氏の「文明の衝突」にもあるように、宗教やイデオロギーが衝突であり、民族が衝突になる。日本はすべてを否定している、それはどういうことなのか。経済第一とか *cleanness* とか勤勉第一、平和第一は日本の歴史の中には少なかった。

少子化、民主主義、自由主義、家族主義とか省エネルギー、都市が発展して教育レベルが高く、文化を大事にする国。日本がそういう風になって来ているから、21世紀国家の一つのリーダーになるというのなら、脱軍備、脱武器輸出、脱宗教、脱イデオロギーの中で、日本文化の何が残っているのだろう。

### 理想主義的平和主義外交

*realism*、現実主義と *idealism*、理想主義という二つの枠は、普通、外交政策を分析するために役に立つ。現実主義とは問題を防衛力で整理することであり、権力の競争を伴う。そうすると、国益が中心となる。現在の日本の政治家はこの言葉を使わないし、日本は勿論武力も持っていない。その代わりに何があるかといえば、日米安全保障条約ということになる。もし、現在日本のアイデンティティーがあるとすれば、それは日米安全保障条約だと思う。

日米安全保障条約が、生物学的に人間がお互いに殺しあうことを抑えている。伝統的な日本の *feudalistic* なシステムを抑えている。その二つの要素を抑えているから、日本がこんなに平和的で民主主義的な国になっているのだろう。

文化と制度との関連は何であるかという、日本は理想主義である。武力を行使せず、経済がメインである。民主主義をプッシュして国際組織に入ること、これが理想主義である。今現在の日本外交政策は理想主義的な外交政策 *satisfaction* スタイルの外交政策といえる。

戦前の日本は富国強兵だったが、いまやスローガンは富国有徳 *virtuous and rich* である。

日本は国連に入り、国連の平和維持活動に参加している。戦争のない、安全なところばかりで参加している。日本は国連の安全理事国家になろうとしているが、武力がないために安全保障理事会に入ることができない。そこに入る資格がない。実際に武力で平和を維持しないとできないのだが、日本の外交政策はあくまでも経済協力と人道援助 *humanitarian assistance* がメインである。外務省のホームページを見ると、その政策は、経済協力、人道援助、難民支援、環境支援といった国連の平和維持活動 (PKO)、科学・技術力の提供をする政府開発援助 (ODA)、安全保障、人権、NGO、文化、IT など、すべて経済援助に集約されるものである。

日本にとって一番難しいことは、制限された力でその影響力を相手に感じさせることである。

たとえば中国には経済力がないが、軍事力がある。軍事力を政治のパワーに変えて活動をしている。アメリカは軍事力も経済力もあるので、両方とも使っている。日本は経済だ

けだが、経済力を政治力に変える指導者が少ない。

## 新しい外交に向けて

先ほど述べたように、日本は外交政策の3つのSのうち、**satisfaction** だけしか考えていない。平和主義で世界に貢献していると自認しているかもしれないが、実際は、どこかで戦争が起こった場合、その地域の安全のために何の役割も果たしていない。西チモールやアジアの周辺で問題が起こっても日本は参加しない。自分の国民の安全性を重視し、武装の地域に行かないように考えている、と世界中から思われているのが日本である。

また、経済、軍事、政治力の中で、経済力しか持たない外交ははっきり言って弱い。これは、伝統的な日本の外交政策とずいぶん違う。

北方領土に関しては、熱心に交渉が続けられてきたが全部失敗している。

なぜ、ロシアが北方領土を返還しないのか。それには当然の理由がある。

一度返してしまえば、もうODAは出てこない。北方領土を持ってさえいれば、援助外交ということで援助が出る。としたら、返す必要はない。どれほど一生懸命やっても、経済のパワーを政治のパワーに変えない限りは、何も出てこないのだ。

中国に対する政策はどうだろう。

サミュエル・ハンチントンは、中国と日本がすべての問題を解決しないかぎり、アジアの安定は不可能であると言っている。しかし、日本の中国に対する政策ははっきりしていない。いつもアメリカに先を越されている。戦前は、脱亜、アジアからヨーロッパへ、アジアは一つとといったいくつかの「幻想」があったが、すべて失敗した。状況は今も変わっていない。中国に対しても、台湾に対しても曖昧な姿勢をとり、政策のやり方が明確でない。この曖昧にして何もしない政策が伝統的なやり方なのではないだろうか。

湾岸戦争のときには、結局、お金を出すことになった。

日本の中近東政策はアメリカの政策とずいぶん違う。アメリカはイスラエルを支持し、日本は石油産油国だけを支持している。イラクがクウェートに入った時、クウェートとの関係が深くて石油ももらっているにもかかわらず、日本は憲法上の問題で何もできなかった。国民の税金をアメリカに送り、アメリカに番犬の役目をしてもらった。この例のように、アメリカがいつも日本の軍事の役割を果たしている。

1979年のイラン革命のときには、アメリカの大使館員が人質になり、人権問題が起こった。

このとき、日本は人権とはどういう意味であるか、という態度をとった。

この問題で当時の外務大臣・大来佐武郎氏がワシントンを訪問したとき、ニューヨークタイムスのトップページに **irresponsible Nippon**、無責任日本と書かれた。日本は同盟を結ぶパートナーに対して、何の助力もしなかった。

結論として、世界の中で日本は人権問題について何もしていない。なぜなら、日本にとっては人権問題が経済外交の邪魔になるからである。

日米安全保障条約は、日本のアイデンティティーの主体になっているのではないかと、私は思う。それがなければ、日本がどのように動くかということが、今日本国内で議論されている。

もし、第9条を変えて、日米安全保障条約がなくなり、アメリカが撤退したとすれば、日本はどうなるかという、戦前の日本的な文化行動様式に戻る可能性がある、というふうに海外からは心配されている。生物的にもそういう要素はある。だとすれば、日米安全保障条約は日本の再軍備を封じ込めるビンの蓋ということになる。本当の日本的な、伝統的な人間行動様式が出ないように、日米安全保障条約がその役割を果たしているのではないかと思う。

最近では、日本は missile defense には参加しないが、TMD やミサイル防衛の地域に参加するなどして、独立的な軍事力を持たないイギリスと同じような国にはなりたくない、ということをはっきり言っている。これは、今、日本の中でアイデンティティーの問題が活発に動いていることを示している。

### 日本の外交選択

私はアイデンティティーを理解するためには、生物的な人間性、そして文化、文明の枠の中でそれぞれがどういう関係にあるのか把握することが一番大事だと思う。一番変化しているのが、この関係である。現在の日本では、文明の要素が日本文化の要素よりも圧倒的に動いている。今、日本は豊かな平和主義的な国になっている。だからこういう外交政策になっているということもあるが、もし憲法を変え、日本の民主主義を変えて、日本的、伝統的な文化に帰るとしたら、天皇制に帰るか、封建時代の身分制度に帰るか、ある意味で日本文化の面は強くなるかもしれない。しかし、別の側面で日本はもっと軍事的な国になるか、もっと貧乏になるか、またはアジアの現在の安定が崩れるようなことになるかもしれない。

だとしたら、どちらがいいかということは、勿論これからの日本人の選択だが、現在の日本外交政策は、日本の新しいアイデンティティーと直接関係があるのだから、その主体になっているアメリカとの関係、日米安全保障条約がなくなれば、日本外交や日本経済だけでなく、全体としてはこれからの日本がずいぶん変わってくるのではないかと私は考えている。

(平成13年6月28日 講演)